

智旭『教觀綱宗』における「化儀四教」の解釈について

篠田 昌 宜

一 はじめに―問題の所在―

テキストは智旭（一五九九―一六五五）述『教觀綱宗』（以下『綱宗』）を用いて考察する。『綱宗』がいつ頃の著作であるかは不明である。本稿では智旭が『梵網經』や『円覚經』などの經典は二つともこの頓教の教説に入れるべきであるとすると説に注目した。智旭は『閱藏知津』のなかでは『梵網經』や『円覚經』を『華嚴經』と同じ教説内容として扱う。宗密（七八〇―八四二）が『円覚經』の注釈書の中で独特の位置付けをした影響は明末においてもその影響は多大なものであった。智旭はこうした華嚴教学者らとは違う位置付けを『教觀綱宗』の「化儀四教」の中で行い、天台教学独特の解釈をしている。どのようにその解釈を行っているのかを考察してゆきたい。

二 「化儀四教」の解釈について

まず、先行研究にふれてみたい。『綱宗』・『釈義』全体の研究としては池田魯参氏の詳細な研究があげられる。池田氏は「『教觀綱宗』・『釈義』の教判論」においては五時八教の全体を総覧し、諦觀「四教儀」そのものを智旭は批判したのではないこと。通の五時説こそが天台教判の第一義的な解釈であると規定し、その解説を先行させている点に問題点があるとしている。⁽¹⁾

本稿では智旭が化儀の四教における頓教の解説の中で、『梵網經』や『円覚經』も頓教のなかに収め、『華嚴經』と同じ教説と主張する内容に注目した。李通玄は『新華嚴經論』⁽²⁾では十教とは別に『梵網經』が論じられ、『華嚴經』とは別の扱いをしている。また宗密は『円覚經略疏』の中で五教を明かし「円教としては『円覚經』の教えの内容をすべて収めている。しかし『円覚經』は円教の内容を部分的にしき収めて

智旭『教觀綱宗』における「化儀四教」の解釈について（篠田）

いない」と述べる。李通玄も宗密も明末の仏教者、特に禪宗に大きな影響を与えている。智旭はこうした李通玄や宗密の教判に対して批判し、以別定通にはならないとする。言い換えれば、「鈍根の声聞を誘引して真実のありのままの姿を悟らせる化導の時期の分け方を見据えた上で、五時に類型化された諸經典が円頓の宗旨に於いては統合されるということ」を定める」ことにはならないと批判するのである。

三 智旭の批判の相手をめぐって

智旭は『教觀綱宗』の中で『円覺經』や『梵網經』の位置付けをめぐって李通玄（六四六～七四〇）や宗密の教判を批判し、教説内容は『華嚴經』と同じ扱いをすべきであるとする。『首楞嚴經文句』の中では子璿とは異なる解釈をしている。同時代の幽溪傳燈とも異なる解釈をしていた。

『阿弥陀經要解』の中で伝燈からはその解釈の内容に影響を受けたものと思われる。しかし株宏について智旭はその教背景に宗密などの華嚴教学の影響を看取しているものと思われる。

『金剛經破空論』では宗密の『金剛般若經疏論纂要』をはじめとして宋代の『林間録』や明代の『指月録』における「応無所住而生其心」の解釈を批判している。

『閱藏知津』では宗密の『禪源諸詮集都序』の中で宗密が

独自の天台教学の理解をする箇所を批判する事などを指摘した。また『大乘起信論裂網疏』について研究してゆく過程で、主に華嚴の祖師達である法蔵（六四三～七二二）や宗密や子璿（九六五～一〇八三）を批判していることが考察できた。

四 『教觀綱宗』原文の検証作業について

まず頓教について説かれる箇所を見てみよう。従来の化儀四教の解釈においては『華嚴經』のみが頓教の部として説かれていたが、智旭は新たに頓教の相を加えて『方等經典』や『般若經』などの諸經にも存在するという。また『梵網經』や『円覺經』も頓教の教説内容に収めるべきであるという。頓教の相については仏の智慧と離れない衆生の心のありかたが頓教の教えを実践修行してゆく上でのベースであり、方等や般若の諸經にもことごとくこうした教えが説かれているとする。

化儀ノ四教ノ説。頓ニ有二義。一ニハ頓教ノ部。謂初メ成道シ為ニ大根ノ人ノ之所ヲ頓ニ説ク。唯タ局ニ華嚴ニ（凡ソ一代ノ中ニ、直ニ説テ境界ノ大法ヲ。不_下与ニ三乗ニ共セ者）。如ニ梵網円覺等ノ經ノ。並ニ宜ク収_二入ス此ノ部ニ。是ヲ謂_二以テ別_レヲ定_レ通ヲ。撰_レシテ通ヲ入_レト別_ニ也。二ニハ頓教ノ相。謂初_ニ發心時、便成正覺。及ビ性修不二、生仏体同等ノ義ヲ。則方等般若ノ諸經ニ悉ク皆有_レ之。〔大正藏四十六卷九三八頁上〕

次に漸教について説かれる箇所について見てみよう。教説内容を三つに分けている。漸教の初は三乗の方便の教えとし

て『阿含經』であるという。次に漸教の中として『方等經典』。これは華嚴・阿含・般若などにおさめることができないものであるという。最後に『般若經』を漸教の後として内容を示す。

漸教の相は時間的な段階を経過して仏になり、煩惱や迷いを断ち切りながら悟りの内容を深めてゆく内容となつてゐる。しかしそれは『華嚴經』にもそうした内容は見られるとされている。

漸^{ニモ}亦^タ二義^{アリ}。一^{ニハ}漸教ノ部。謂^フ惟^ダ局^{ニテ}阿含^ヲ為^シ漸ノ初^ト（凡^ソ一代ノ中^ニ、所^レ説^ク生滅ノ四諦・十二縁生・事ノ六度等。三乗ノ權法、並^ニ宜^ク収^メ入^ス此部^ニ）方等^ヲ為^シ漸ノ中^ト（凡^ソ一代ノ中^ニ所^レ説^ク彈偏^ヲ斥^ヒ小^ヲ歎^ジ大^ヲ褒^スル^ヲ等ノ經。及^ビ余ノ四時^ニ所^レ不^レ攝^セ者。並^ニ宜^ク攝^メ入^ス此部^ニ。如^キ増上縁ノ名義寛^{キガ}故^ニ）般若^ヲ為^シ漸ノ後^ト（凡^ソ一代ノ中^ニ、所^レ説^ク若^シ共不共、諸ノ般若ノ教。並^ニ宜^ク攝^メ入^ス此部^ニ）二^{ニハ}漸教ノ相。謂^フ歴劫ノ修行断惑証位ノ次第^ヲ。則^チ華嚴^{ニモ}亦復有^レ之^レ。法華ハ會^{シテ}漸^ヲ歸^ス頓^ニ。不^レ同^ニ華嚴ノ初説^ニ。故^ニ非^ズ頓^ニ。不^レ同^ニ阿含方等般若ノ隔歴^{シテ}未^レ融^セ。故^ニ非^ズ漸^ニ。然^{シテ}仍^チ双^ニ照^ス頓漸ノ両相^ヲ。（大正藏四十六卷九三八頁上）

次に秘密教についての智旭の解釈を見てみよう。秘密教の教説内容は人によつては華嚴のような教えを。また別の人には『阿含』『方等』『般若』が説かれることが述べられている。お互いその存在は知らず、それぞれ仏の教えの恩恵を受けていることが述べられる。秘密呪については五時教の全ての教

智旭『教觀綱宗』における「化儀四教」の解釈について（篠田）

えに陀羅尼の文章や文句が存在することが示される。

秘密^{ニモ}亦^タ有^二二義^一。一^{ニハ}秘密教。謂^フ於^{ニテ}前四時ノ中^ニ。或^ハ為^シ彼ノ人ノ説^ク頓^ヲ。為^シ此ノ人ノ説^ク漸^ヲ等。彼此互^ニ不^レ相^レ知^ラ。各々自得^ヲ益^ヲ（法華ハ正直^ニ捨^テ方便^ヲ。但^ダ説^ク無上道^ヲ。故^ニ非^ズ秘密^ニ）二^{ニハ}秘密呪。謂^フ一切ノ陀羅尼章句^ヲ。即^チ五時ノ教中。皆悉^ク有^レ之^レ。（大正藏四十六卷九三八頁上）

次に不定教についての智旭の解釈を見てゆこう。不定教の教説内容は人によつては華嚴のような教えを説き、また別の人には『阿含』『方等』『般若』が説かれるという。それぞれお互いの存在については知っており、それぞれが仏の教えの恩恵を受けていることが述べられている。不定の益については『華嚴』『阿含』『方等』『般若』の前の四時においては頓教を聞いた人には漸教の恩恵を得させ、漸教を聞いた人には頓教の恩恵を得させるのだとしている。

不定^モ亦^タ有^二二義^一。一^{ニハ}不定教。謂^フ於^{ニテ}前ノ四時ノ中^ニ或^ハ為^シ彼ノ人ノ説^ク頓^ヲ。為^シ此ノ人ノ説^ク漸^ヲ。彼此互^ニ知^テ各々別^ニ得^ヲ益^ヲ。即^チ是^レ宜^ク聞^ク頓者ハ聞^キ頓^ヲ。宜^ク聞^ク漸者ハ聞^キ漸^ヲ也（法華ハ決定^{シテ}説^ク大乘^一。故^ニ非^ズ不定教ノ相^ニ）二^{ニハ}不定ノ益。謂^フ前ノ四時ノ中、或^ハ聞^ク頓教^一得^テ漸ノ益^ヲ。或^ハ聞^ク漸教^一得^テ頓ノ益^ヲ。即^チ是^レ以^テ頓助^ヲ漸^ヲ。以^テ漸助^ヲ頓^ヲ也（隨聞^ニ法華ハ一句一偈^ヲ。皆^ナ得^テ受記作^ス仏^一。故^ニ非^ズ不定ノ益^ニ也）。（大正藏四十六卷九三八頁中）

次に智旭が頓・漸・不定の教説内容が化法の四教や五時の内容とどのように関連するのかを説く内容を見てゆきたい。

智旭『教觀綱宗』における「化儀四教」の解釈について（篠田）

頓教については円教・別教の部であり、漸教は四教の教説内容に相当する。顕露不定・秘密不定の二つは前四時と四教に相当する教説内容であることが示されている。

頓教の相の内容は円教に配当させているもののそれは前三教に頓教の内容が含まれていると説く。漸教の相は前三教の内容に分類されるとしながら、円教にも漸教の意味が存在するとし、その例として六即説をあげている。秘密教は教えを受ける人が互いを知ることが出来ないで伝えられないとし、秘密呪は四悉檀にその内容を該当させている。不定教と不定益の二つは前の四時の内容に該当させている。

頓教ノ部ハ止ヲ用ニ円別ニ種ノ化法ヲ。漸教ノ部ハ具ニ用ニ四種ノ化法ヲ。顕露不定ハ既ニ遍ニ四時ニ。亦タ還テ用ニ四種ノ化法ヲ。秘密不定モ亦タ遍ニ四時ニ。亦還テ用ニ四種ノ化法ヲ。頓教ノ相ハ局テ在リ円ニ。通ハ則チ前ノ之ニ三教ニモ、自各々有ニ頓ノ義。如シ善来ニ得ニ阿羅漢ニ等ノ。漸教ノ相ハ局テ在リ藏通別ノ三ニ。通シテハ則円教ニモ有ニ漸ノ義。如シ觀行・相似・分証・究竟等ノ。秘密教ハ互ニ不相知ヲ。故ニ無シ可キ伝フ。秘密呪ハ約ス四悉檀ニ故ニ有リ可キ伝。不定教・不定ノ益ハ並ニ入リ前ノ四時ノ中ニ故ニ無シ別部ノ可キ指ス。（大正藏四十六卷九三八頁中）

次に釈尊の説法の方法である化儀の三つの観について智旭が言及する箇所を見てみよう。頓觀・漸觀・不定觀については明らかにするが、秘密教に該当する観は伝えることができない性質上あきらかにできないとする。頓教とは『華嚴經』のことであり別教の教えを兼ね合わせている。頓觀は円教の

修行者が初住の段階から一切諸法の差別が真実であることを知る観に該当させている。漸教とは阿含・方等・般若の三時を指し、教えの意味内容は藏通別円の四教の内容を兼ね合わせている。仮の教えとして立てたものからその意義を知り、真実の教えを顯し出すところまではいかない。漸觀は円教の修行者は仏の悟りについての理解力があるものの、修行については順序を追って低いところから高いところと行く修行のあり方に該当する。不定教は前の四時の内容を指し、四教の内容を兼ね合わせているが『法華經』の真実の教えとそれ以外の教えが対立し、両者が超絶するまでには至っていない。不定觀は円教の修行者は仏のさとりについて申し分のない理解力があり、漸教を修行して超越して悟りを得、また頓教の修行して漸次に悟りを得ることに該当するとしている。

約ニシテ化儀ノ教ニ復タ立ニ三ノ觀ヲ。謂フ頓觀漸觀不定觀ヲ。蓋シ秘密教ハ既ニ不レ可カラ伝フ。故ニ不レ可ニ約シテ之ニ立ツ觀ヲ。設シ欲レハ立レト觀ヲ。亦止ニ是レ頓漸不定ノ三法、皆ナ秘密ナルノミ耳。今此ノ三觀。名ハ与レ教同シテ。旨ハ乃チ大ニ異ナリ。何ヲ以テカ言レ之ヲ。頓教ハ指ニ華嚴經ヲ。義則兼レ別ヲ。頓觀ハ唯約ス円人ノ初心ヨリ便チ觀ニ諸法実相ヲ。如ニ摩訶止觀ニ所レ明ス是レ也。漸教ハ指ニ阿含方等般若ヲ。義ハ兼ニ四教ヲ。復タ未ダ開顯セ。漸觀ハ亦タ唯約ス円人、解ハ雖ニ已ニ円ナリト行ハ須ク次第ニ。如ニ釈禪波羅蜜法門ニ所レ明ス是レ也。不定教ハ指ニ前ノ四時ヲ。亦兼ニ四教ヲ。仍ク未ダ會合セ。不定觀ハ亦タ唯約ス円人ノ解ハ已ニ先ヨリ円ナレドモ随テ於ニ何レノ行ニ。或ハ超、或ハ次、皆ナ得ルニ悟

入スルヲ。如^ニ六妙門^ニ所^ノ明^ス是^レ也^{（此ノ本ハ在リ高麗国ニ。神州失ス伝）}。
 （大正蔵四十六卷九三八頁中）

次に智旭がこれまでの化儀四教の内容と観の内容について解説している箇所を見てゆきたい。止観は円頓止観のみを説けばいいのに、なぜ漸観や不定観を説く必要があるのかの理由を述べる。仏教を理解する機根が様々である点をカバーするため、円頓止観のみを説くことはそうした人々を相手に広範囲の観の内容を説くことが出来ないからだという。次に漸教や不定教と言うが、円教の修行者ばかりをそれぞれの観に該当させているのは何故かの理由を述べている。円教の修行者のみかどのような段階の仏の教えも一乗の真実の教えの内容として受け止められるからだという。この円教の内容を理解する力無くしては修行や仏の悟りについて論じることが出来ないからであるという。

問、但^ダ説^テ円頓止観^ヲ即足^ル。何^ノ意^ソ復^タ説^ク漸及^ビ不定^ヲ。答、根性各々別ナリ。若^シ但^ダ説^カ円頓^ヲ。収^レルコト機^ヲ不^レ尽^ス。問、既^ニ称^ス漸及^ビ不定^ト。何^ガ故^ソ惟^ダ約^ススルヤ。円人^ニ。答、円人受^レバ法^ヲ。無^シ法^トシテ不^レルコト円ナラ。又未^タ開^キ円解^ヲ。不^レ應^ニ輒^ク論^ス修証^ヲ。縦令^ヒ修証^{ストモ}未^ダ免^レ日劫相倍^ニ。 （大正蔵四十六卷九三八頁下）

五 おわりに

明末の時代に共通して『円覚経』や『梵網経』の思想にだ

智旭『教観綱宗』における「化儀四教」の解釈について（篠田）

れもが影響を受けていた。智旭も例外でない。特に宗密や李通玄の注釈書は当時の仏教者達にかなり広く読まれていただろう。とりわけ禅宗の人々に与えた影響は計り知れない。雲棲株宏も宗密の『円覚経』の教判の位置付けを注目していた。智旭は明確に『円覚経』や『梵網経』の内容を頓教であり『華嚴経』と同じ教説内容として扱う。開頭の立場では円頓の宗旨として統合されるこれらの三経も、五時においては前四時という枠組みを出ない。ここに当時の禅宗に影響を与えた華嚴教学への批判を感じると同時に、智旭が『法華経』至上の教学体系に違和感なくとりいれてゆく様子がみられる。智旭は諦観『天台四教儀』やそれに影響をうけた天台教学者を批判する意味で『教観綱宗』を著した。しかしこうした時代の要請として向かい合わざるを得ない状況が一方ではあったとも思える。

- 1 池田魯参『教観綱宗・釈義』の教判論（『駒澤仏教論集』第七号、一九七六年十月）。
- 2 李通玄『新華嚴経論』では『梵網経』を「不同華嚴経毘盧遮那所説也」（大正蔵三六卷七二二上）という扱い方をしている。

〈キーワード〉 中国、明末、中国天台、智旭、宗密、李通玄、『教観綱宗』、化儀四教

（駒澤大学大学院満期退学）